2．東日本大震災復興支援フォーラムに関する報告

はじめに

龍谷大学では、2011年3月11日の東日本大震災発災直後から、被災地でのボランティア活動や学内での啓発活動等、復興支援のための様々な取り組みを実施してきました。

発災から10年目にあたる2020年度は、この10年間をふりかえる事業として下記の3点を目的にフォーラムを開催するとともに、本学の10年間の取り組みをまとめた活動報告書を作成しました。

（1）2011年から、本学で行った復興支援活動の取組について下記の①～③の視点から総括する。
①どのような活動を展開したのか。
②大学が「災害時に復興支援活動を行うこと」「震災と防災について学ぶ機会を創ること」の意義。
③「震災の復興支援に関わった経験」は、その後の学生にどう影響したか。

（2）東日本大震災とはどのような災害であったか改めてふりかえり、復興へと歩みを進める中で実践されてきた語り部の活動や、防災教育について学ぶ。

（3）2020年は、新型コロナウイルス感染症感染拡大の影響により世界中がパニック状態にある中、日本各地で豪雨による災害が起こるなど、非常に困難な状況下で災害復旧のための市民活動が展開された。災害時には日常では見過ごされやすい課題が浮き彫りになる。その時の事例に学び、これからの防災・減災について考える。

事　業　名	**東日本大震災復興支援フォーラム　発災から 10 年 あらためて震災を振り返り、その経験を「知恵」とする**
実施日時／場所	2021 年 2 月 6 日（土）　13：00 ～ 15：45 ／深草キャンパス成就館 ★オンライン形式で配信
実施主体／運営	龍谷大学／ボランティア・NPO 活動センター
参加人数	最大視聴者数：205 名　※見逃し配信 248 回再生（3 月 14 日時点）　申込数：269 名
司　会	大屋 晴太郎（農学 3）　早川 歩伽（文学 2）
第一部	「東日本大震災をふりかえる」 これまでの龍谷大学の取り組み報告／活動参加者からの報告／卒業生報告
第二部	「3.11 を学びに変える」
第三部	「これからの災害とどう向き合うのか」
その他の取り組み	東日本大震災復興支援ボランティア活動報告書（2011 年～ 2020 年）の作成 および本事業の各種広報

第一部の冒頭には、ボランティア・NPO 活動センターの学生スタッフが制作した復興支援の 10 年を辿る動画を放映しました。

【開会の挨拶】

学長の入澤でございます。

本日は、龍谷大学主催の東日本大震災復興支援フォーラムにご参加いただきありがとうございます。

2011 年 3 月 11 日、東日本大震災が発生し、東日本の太平洋沿岸部の広い範囲に、甚大な被害をもたらしました。来月､あれから 10 年を迎えます。

あらためて、犠牲となられたお一人お一人に対し、哀悼の意を表しますとともに、被災されました皆さまに心からお見舞いを申し上げます。また、懸命に救助・救援活動にあたられた皆さま、被災地や被災者への生活支援の活動、インフラ復旧など復興にあたられた皆さまのご尽力に心から敬意を表します。

本学では、発災直後の募金活動に始まり、ボランティア・NPO 活動センターが事務局となり、学内外において様々な復興支援活動を続けてまいりました。一人の力はとても微力であっても、学生、教職員、卒業生、保護者など多くの本学関係者が協力しあい、「チーム龍大」として一丸となれたからこそ、この 10 年間、復興支援活動に取り組み続けることができました。

その中でも、継続的に行ってきた宮城県石巻市でのボランティア活動は、今年度、新型コロナの影響を受けて実施することができませんでしたが、2011 年 6 月に実施して以降 25 回を数え、のべ 692 名の学生・教職員が参加しました。さらに、2015 年からは福島スタディツアーを毎年開催するなど、距離的には遠い東北の地に赴き、被災地の皆さまと交流しながら、震災について学ぶ機会を積極的に設けてきました。

これらの取組を通して、学生は被災地域の抱える想像を超える多くの不条理や深刻な課題の現実を目の当たりにして、実は何も知っていなかったことに気づかされました。そして、被災地で感じた矛盾を自分たちの住む地域に重ね合わせながら深く考え、模索する良い機縁をいただくことができ、参加した学生の人間としての成長につながったものとなりました。

総合司会を務めた復興支援活動に参加した学生と
福島スタディツアーに参加した学生スタッフ

開会にあたり挨拶する入澤 崇 学長

この震災発災以降をみますと、日本各地で、地震や台風、豪雨による自然災害が発生し、そのたびに大きな被害が繰り返し起こりました。また、私たち人間は、これら自然の猛威に対していかに無力であるかを実感する 10 年でもありました。私たちは、そうした深い悲しみと喪失感を抱えながらも、一方では人と人とがつながりあって励まし合い、助け合い、支え合って幾多もの困難を乗り越えてきたのです。

今、私たち人類は、新型コロナというあまりに問題が深刻で、これまでに経験したことのない大きな危機に直面しています。この新型コロナは、私たち人間同士を物理的に引き離し、つながりあうことを阻害する新たな災害といえます。しかし、不安におののいてばかりにもいきません。共に力を合わせて、この危機を乗り越えていかねばなりません。そのための新たなつながり方の模索が求められています。

本学は、昨年度創立 380 周年を迎え、その基本コンセプトとして行動哲学「自省利他」を掲げています。本学の建学の精神「すべてのいのちを尊ぶ」という利他的な生き方です。「利他」は、他者を排除する「排他」とは真逆の精神作用で､「自省」は、今の自分は果たしてこのままで良いのかなど省みて、他者の安寧に資する行動を心がける、このことこそが、これからの人と人との新たなつながり方を模索するうえで、大きなヒントになると思います。そして、今の困難な局面を皆さまとともに力を合わせて、乗り越えて行きたいと思います。どうぞ、引き続き、皆さまの温かいお心とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

最後に､ご多用のところご登壇いただきます「佐藤敏郎様」､「長谷部治様」､「白土奈央様」に、心から感謝を申しあげ、開会にあたりましての挨拶とさせていただきます。

本日は、ありがとうございます。

第一部	「東日本大震災をふりかえる」 これまでの龍谷大学の取り組み報告／活動参加者からの報告／卒業生報告
実施・配信時間	13 時 10 分～ 13 時 45 分
出演および 関係者	【現役学生からの報告】吉田　樹（法学 4）　川村 有希（政策 4） 【卒業生からの報告】白土 奈央（2016 年度法学部卒業） 【動画制作】濱田　葵（文学 2）　井関 萌乃（文学 1）　三宅 碧斗（経済 1） 松本 航紀（経営 1）　伊野 涼雅（短大 1） 【演奏・歌唱及びインタビュー協力】 龍谷大学吹奏楽部学生／スタッフ有志（瀬田・深草）

1. 趣旨・目的

2011 年から 2021 年までの龍谷大学が取り組んできた東日本大震災復興支援活動をふりかえると共に、この活動が参加した学生に対してどのような影響を与えたのかを考える機会としました。

2. 概　要

以下の流れで報告しました。

【動画上映】

在学生の動画チームが作成した「10 年間の活動をまとめた動画」を上映しました。

【現役学生からの報告】

現役学生がこれまで本学が取り組んだ東日本大震災復興支援活動や、自身が参加して感じたことなどをスライドと共に報告しました。

【卒業生からの報告】

卒業生（2016 年度・法学部卒）で、現在は千葉県の特別支援学校で教員をしている白土奈央さんから、在学中に行った復興支援活動が、現在の自分にどうつながっているのかについての報告がありました。

3. 参加者の声・得られた効果など

視聴者アンケートでは、以下のような声が寄せられました。

- 龍谷大学生たちが 10 年間でどのような活動を行っていたのか、映像、写真から存分に伝わってきました。学生１人１人が想いをもって真剣に活動していた様子を聞き、ボランティアとは一方的な支援ではなく共に寄り添う姿勢が大切なことが分かりました。卒業生の方も大学での雄勝のボランティア活動の経験を生かして実際働いており、活動したことが職業と結びついていることに感動しました。
- 震災当時小学生で全くその出来事が身近でなかった学生が、先輩の熱い思いを聞いてボランティアに行ってみる、そこで自分ごとになるという流れが素晴らしいと思いました。活動した学生がその後どのように経験を生かしているかという話は興味深かったです。またそれを追いかけられる関係性も平時からの活動支援の賜物だろうなと感じました。
- 元学生スタッフです。手探りの募金活動からはじまった活動が、学生スタッフの世代交代を経てもなお続けられていることが伝わってきました。受け継いでくれている彼らに、感謝を伝えたいです。

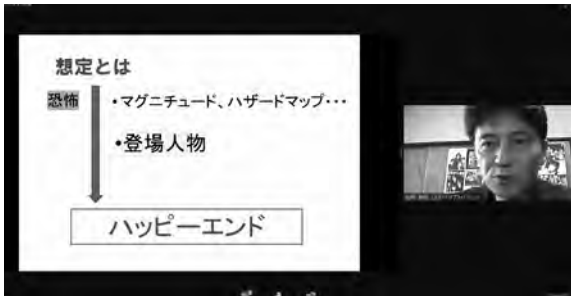
第二部	基調講演 「3.11 を学びに変える」
実施・配信時間	13 時 50 分～ 14 時 40 分
出演および関係者	【講　　演】佐藤 敏郎 氏（スマートサプライビジョン特別講師） 【動画制作・出演】濱田　葵（文学 2）　井関 萌乃（文学 1）　三宅 碧斗（経済 1） 松本 航紀（経営 1）　伊野 涼雅（短大 1） 【動画出演】深草・瀬田の学生スタッフ有志

1. 趣旨・目的

東日本大震災とはどのような災害であったか改めてふりかえり、復興へと歩みを進める中で実践されてきた語り部の活動や、防災教育について学ぶために実施しました。

2. 概　要

佐藤敏郎氏による基調講演。元教員としての立場と、震災で次女を亡くされた遺族としての立場から、実体験に基づいて、災害との向き合い方、3.11 から何を学び、未来にどうつなげていくのかについてご講演いただきました。「シンプルに丁寧に命と向き合う」「今は震災後ではなく震災前。災間」「津波が『来る』『来ない』ではなく、避難『する』か『しない』か」「希望の防災」など、たくさんの印象的で示唆に富む言葉で、深く心に残るお話をしていただきました。



【番外編動画の上映】

休憩時間に、動画制作の過程で動画作成チームの中に積もってきた想いをまとめた「番外編」動画を上映しました。

3. 参加者の声・得られた効果など

視聴者アンケートでは、以下のような声が寄せられました。

- 胸が熱くなり、心に響く講演でした。助かるはずの命を、今後は助けられるよう、自分事として考えていきたいと思います。ありがとうございました。
- 今は震災後ではなく震災前。災間という言葉にハッとしました。
- 貴重なお話を聞くことができ、オンライン上でもこんなにも伝わってくるものがあると気付くことができました。
- 災間。コロナ禍の渦中の今は災害時。東日本大震災からの学びを今どのように活かしていけばよいのか考えさせられました。大震災についてはこの 10 年考えてきたが、感染症については考えたこともなかった。震災だけではなく他の災害にも準備と訓練が必要。どんな災害であれ命を真ん中に想像力を働かせ念のためを考えることが必要。
- 自分に抜け落ちていたもの、今後災害が起こることから目をそらしてきたことなど、改めて考える良い機会となりました。

第三部	「これからの災害とどう向き合うのか」
実施・配信時間	15 時 10 分～ 15 時 40 分
出演および関係者	長谷部 治 氏（神戸市兵庫区社会福祉協議会　地域支援課　課長） 筒井 のり子（ボランティア・NPO 活動センター長／社会学部教授）

1. 趣旨・目的

2020 年は、新型コロナウイルス感染症感染拡大の影響により世界中がパニック状態にある中、日本各地で豪雨による災害が起るなど、非常に困難な状況下で災害復旧のための市民活動が展開されました。災害時には日常では見過ごされやすい課題が浮き彫りになります。その時の事例に学び、これからの防災・減災について考えるために実施しました。

2. 概　要

長谷部治氏より話題提供。長谷部氏は、学生時代の阪神淡路大震災のボランティアをきっかけに社会福祉協議会に入職。今回は、阪神淡路大震災の反省が現在の復興支援にどう活かされているか等、災害支援の変遷や、コロナ禍の現在における取組を話されました。

また、多様な被災者と個別的につながるための試行錯誤についてお話しをお聞きしました。

筒井のり子センター長から「大学ボラセンへ一言」と求められ、長谷部氏は「卒業後、社会に出てからもボランティア促進につながる仕組みづくりにも取り組んで欲しい」と語られました。

3. 参加者の声・得られた効果など

視聴者アンケートでは、以下のような声が寄せられました。

・災害ボランティアは浸透してきたけれども、専門職として改めて今後のあり方について考えなければならない時期に来ているんだと痛感しました。

・いろんな災害の経験を経て、いろんなことがマニュアル化され、整えられてきていることは、いいことであり必要なことでもあると思います。しかしながら、公共化されていくにつれ、個人が薄らいでいくような印象も受けます。ボランティアこそ人と人との関わりだということを大事にしたいと思いました。

・仕事・家庭以外にも社会や地域活動での役割を持つ大切さについて考え、今後自分に何ができるのかどのように向き合うべきなのかを考える必要があると感じました。

・大学を今年で卒業するのですが、卒業してボランティアを終わりにしてはいけないと感じました。ボランティアを続けられる、社会人になりたいです。

【閉会の挨拶】

皆さま、長時間ご参加いただきありがとうございました。これで本日の全プログラムが終了となります。

災害時のボランティアに参加する形はさまざまで、学生が活動する時も、個人で参加したり、NPO の活動に参加してそこから被災地へ行ったりなど、多様な形があっていいと思っています。学生が活動する際に、センターではその都度個別にもサポートしており、大学としてもボランティアバスを運行するプログラムを作っています。

改めて今回このフォーラムの準備をしながら、「大学という組織がこのようなことに取り組む、その意味は何か」ということを考えさせられました。

機動力という点では、少しそれは弱いように感じます。学生の安全というものを確保する必要があることに加え、丁寧な情報収集や調整を経てプログラムをしっかり作ってから学生と共に現地へ向かう。スピード感という点では少し遅くなる一方で、その活動後に関しては大学だからこそできるということがあるのではないかということを思います。

被災された地域での活動から戻ってきた後、体験を通して学生はさまざまなことを思います。行って経験したいろいろなことについて、個人的な感想から少し客観的に見たり、他のメンバーと話し合って経験を深めたりするプロセスを、大学という組織として行う。例えばふりかえりをしたり、戻ってきてから報告会を開催したり、あるいは活動に行った後でレポートや原稿を書いてもらう。そういう中で深め合い、その一体験や感じたこと一つから、もう少し深い学び地へ向かうといったことができるのではないかと思います。

もう一点、第一部で学生が発表していたように、「語り継ぐ人を増やしていける」、これが大学の強さだと今回改めて思いました。「もともとはそれほど関心がなかったけれども、先輩がとても熱く語るのを聞いて行ってみようと思った」といった発言がありました。やはりその語り継ぐ人をどれだけ増やしていけるか、その連鎖をどう作っていけるか、そういったことに取り組めるその可能性を、改めて大学として感じたところです。

東日本大震災から 10 年ということで、区切りという表現が適切かはわかりませんが、少しずつ形は変わっていくだろうと感じる中、龍谷大学として東日本の復興支援、あるいはその他様々な災害にこれからも継続して取り組んでまいりたいと思います。

多くの方々、私共の活動を支えてくださった東北の皆さま方、そして関係者、教職員、そして何より先輩の学生スタッフ、その他の皆さま、本当にありがとうございました。これからも龍谷大学へ応援をいただければと思いますと共に、これをもちまして閉会の挨拶とさせていただきます。皆様本日はどうもありがとうございました。

【視聴いただいた皆さんからのメッセージ】

- 本当に学ぶべきことの多いお話でした。いつ震災の当事者になってもおかしくない時代を生きていながら、そしてこうしたシンポジウムに参加していても、心のどこかでは他人事になっている自分を認識したりします。プラネタリーバウンダリーが議題にあがるように、コロナもそうですが、異常気象や自然災害など、私たちみんなが災害の真っ只中に放り出される可能性のある中で、どう向き合っていくのかを常に考えていく必要があるのだと思いました。
- 災害支援、ボランティア活動への参加動機は何でもよいと考えている。大事にすべきは、その後どう活動し、何を感じ、どのように変化したが大事だと思った。あらゆる知識よりも経験に勝るものはない。今回発表いただいた学生、卒業生の言葉からはこのような内容が十分に感じられた。本当に懸命に活動に当たり、考え悩んでいるのだと思った。ぜひ後輩につなげていってほしい。

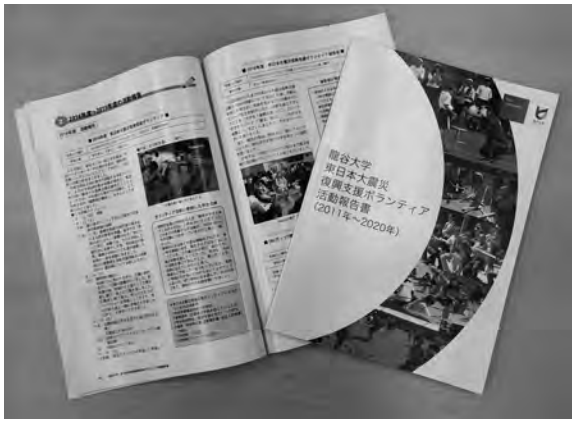
その他の取り組み	東日本大震災復興支援ボランティア活動報告書（2011 年～ 2020 年）の作成および 本事業の各種広報
取り組み期間など	広報期間：2020 年 11 月～ 2021 年 3 月 東日本大震災復興支援ボランティア活動報告書（2011 年～ 2020 年）発行：2021 年 2 月 1 日
報告書関係者	【執　筆】筒井 のり子 センター長（社会学部教授）　竹田 純子 コーディネーター 【寄　稿】元学生スタッフ　関係教員　関係団体の皆さん 【編　集】竹田 純子 コーディネーター
広報関係者	【チラシ制作】上手 礼子 コーディネーター 【広報統括】中島 崇史（職員） 【取材調整･対応】筒井 のり子 センター長　中島 崇史　竹田 純子 コーディネーター

1. 趣旨・目的

龍谷大学では 2011 年に東日本大震災が発生して以来、募金活動から始まって東北の物産展の実施や復興支援ボランティアバスの運行、復興支援フォーラムの開催など、2019 年まで毎年様々な復興支援活動を行ってきました。その報告として、事務局を担うボランティア・NPO 活動センターの年次報告書に毎年の復興支援活動について掲載したり、2011 年～ 2015 年の 5 年間の報告書を作成してきました。

このたび、『東日本大震災復興支援フォーラム発災から 10 年』の開催に合わせて、龍谷大学の 10 年の復興支援活動を改めてふりかえり、学内外に広く発信するために『東日本大震災復興支援ボランティア活動報告書（2011 年～ 2020 年）』を作成することになりました。

また、本フォーラムはさまざまなメディアからも注目され、多くの取材を受けています。報告書発刊も含めた一連の広報についても、20 周年事業と同様にプレスリリースや SNS 発信を活用した形で取り組みました。



2. 概　要

【活動報告書（2011 年～ 2020 年）】

以下の構成で 1,000 部発行し、公式 HP にも掲載しました。

・活動報告書の発刊にあたって
　学長　入澤　崇
・第一部　龍谷大学　復興支援活動の概要
・第二部　取組んだ復興支援活動について
・第三部　関係者からのメッセージ
・第四部　学内のゼミ等による取り組みについて
・第五部　資料集

【取材・報道件数等】

以下のとおり報道されました。(P.92 ～ 97 参照)

・2021/2/4　朝日新聞（朝刊・京都版）
・2021/2/6　NHK ニュース（関西版）
・2021/3/1　本願寺新報
・2021/3/9　京都新聞（朝刊）
・2021/3/11　読売新聞（朝刊・滋賀版）

東日本大震災復興支援フォーラム
チラシ・ポスター

3. コーディネーター所感

今年度は新型コロナウイルス感染症感染拡大の影響により、ボランティアバスの運行を始め様々な活動が中止になりましたが、フォーラムや報告書の作成は予定通り実施することができました。

フォーラムは参加者の満足度も高く、多くのメディアにも取り上げられました。また、活動報告書においては、東北の関係団体のみなさんや先生方にも寄稿いただくなど、多くの方々にご協力いただき完成しました。本当にありがとうございました。

今後も今まで紡いできた東日本大震災復興支援への想いを絶やさないように、新たな活動の方策を模索してまいります。

東日本大震災復興支援ボランティア活動報告書はこちらからご覧いただけます。

龍谷大学　東日本大震災復興支援フォーラム

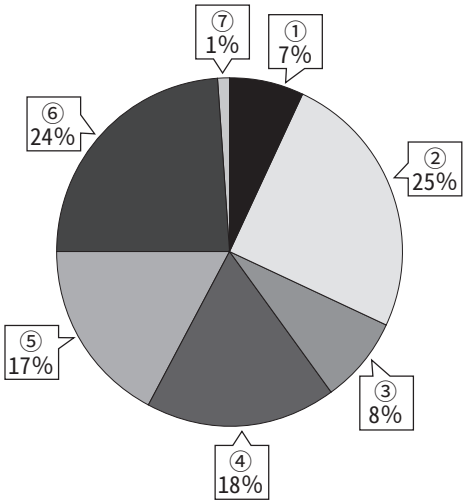
発災から 10 年
あらためて震災を振り返り、その経験を「知恵」とする

参加者アンケート

（申込数：269 名　当日参加数：205 名）

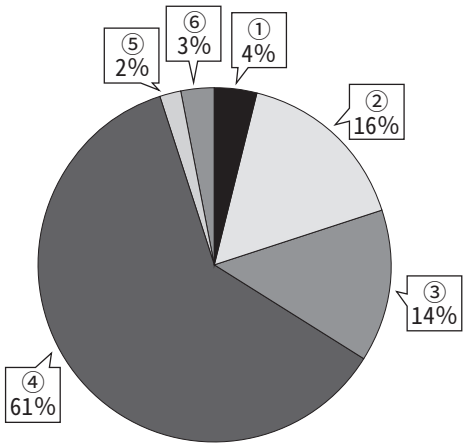
アンケート回答数 117 件（見逃し配信含む）

1．年代をご回答ください。



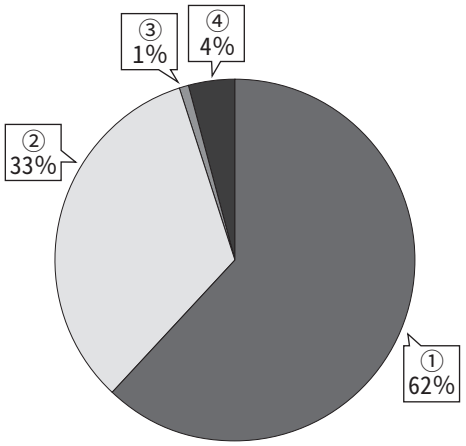
① 10 歳代
② 20 歳代
③ 30 歳代
④ 40 歳代
⑤ 50 歳代
⑥ 60 歳代
⑦ 無回答

2．居住地域をご回答ください。



① 北海道・東北地域
（北海道・青森・岩手・宮城・秋田・山形・福島）
② 関東・甲信地域
（埼玉・千葉・東京・神奈川・茨城・栃木・群馬・山梨・長野）
③ 北陸・東海地域
（新潟・富山・石川・福井・岐阜・静岡・愛知・三重）
④ 近畿地域
（滋賀・京都・大阪・兵庫・奈良・和歌山）
⑤ 中国・四国地域
（鳥取・島根・岡山・広島・山口・香川・徳島・愛媛・高知）
⑥ 九州地域
（福岡・佐賀・長崎・熊本・大分・宮崎・鹿児島・沖縄）

3．この度のフォーラムにご参加されての満足度をご回答ください。



① 満足
② やや満足
③ やや不満足
④ 不満足